

<調査速報>

ペルー北部高地、パレドネス遺跡の発掘調査-2006年

渡部森哉
(南山大学人文学部)

1. はじめに

パレドネス遺跡はペルー北部のヘケテペケ川支流のサン・パブロ川の左岸に位置する遺跡である(図1)。はじめにこの遺跡を発掘対象として選んだ経緯について説明したい。

筆者はペルー北部高地に位置するタンタリカ遺跡において1999年、2000年、2004年に発掘調査を実施した(図1; Watanabe 2004a; 渡部 2004b, 2005b)。発掘結果に基づき、タンタリカは地方王国期にチムーの支配下で建設され、インカ期、植民地時代初期に再利用されたと筆者は解釈している。土器は海岸系のものが主体であるため、海岸から人々が送られてきたと考えられる。

高地に海岸系の文化の大遺跡があることはそれまで十分認識されていなかった。一体、チムーは高地にどのような形で進出したのか、その規模はどれくらいだったのか、そしてインカによる征服後どのように変化したのか。タンタリカ遺跡の調査結果から展開できるテーマは多くあった。

タンタリカ遺跡の位置する山の標高は頂上部で3289 mある。そこからヘケテペケ川を一望することができ、そこに至るルートもいくつかある。おそらくタンタリカは単独で存在するのではなく、いくつか他の遺跡とセットになって機能したと予想された。ヘケテペケ川中流域でタンタリカ遺跡の同時代の海岸起源の遺跡を発掘調査すれば、チムーの山地支配の実態をより鮮やかに描き出すことができると考えられた。また、標高3000 mのタンタリカと標高約800 mのヘケテペケ川流域の遺跡を比較することによって、ジョン・ムラの提唱した垂直統御モデルのバリエーションを押しえることができる可能性も想定した(Murra 1972)。筆者はムラの提示した大規模な垂直列島モデルやそれに類似した大規模な環境利用のあり方は、インカやティワナク、ワリといった大規模な政体の下ではじめて可能となる形態であり、小規模な政体が林立した状態では不可能であると考えている。そのためパレドネス遺跡の発掘調査の目的の1つを、チムーという海岸の政体が山地に進出し、高度差を利用した環境利用の実態を実証的に示すこととした。

パレドネス遺跡はタンタリカ遺跡と同様に保存状態が比較的良く、高さ3 m以上もある壁も残っている(図10-12)。モルタルを用いて割石を積み上げた壁の面の特徴や、壁の装飾と考えられる約10 cm四方の小規模な壁龕(図38)などがタンタリカ遺跡の建築と類似性している。また、

タンタリカ遺跡ではインカ期のチュルパ¹を一基発掘したが (Watanabe 2004a)、パレドネス遺跡にもチュルパが複数あることが表面から確認できた。筆者はパレドネス遺跡発掘開始以前には塔状の地上墳墓であるチュルパがペルー北高地に現れるのはインカ期であると、複数の証拠から想定し、パレドネス遺跡はタンタリカと同様にチムー期に建設されインカ期に再利用されたという作業仮説を持っていた。

先スペイン期においてはペルー北海岸からカハマルカ盆地に至る主要なルートは、現在の車道が通るヘケテベケ川の本流沿いではなく、その支流であるサン・パブロ川、あるいはその一本西を流れるサン・ミゲル川沿いであると考えられた。そのため、インカ道は確認されていないが、パレドネスがインカ期のタンブ (行政センター) の一つであるという可能性も想定した。

一方、パレドネス遺跡で表面調査を実施したファン・ウガスは、同遺跡でカハマルカ中期後半 (A.D. 700-900) のカオリン土器の 1 タイプである *Cajamarca Floral Cursive* を収集したという (Ugaz 1999)。そして彼は同遺跡はカハマルカ盆地に本拠地を構えるカハマルカ文化の人々が暖かい環境であるユンガ地帯を開発するために設置した飛び地 (enclave) であるという仮説を持っていた。はたしてパレドネスはインカ期・チムー期の遺跡か、あるいはそれよりも古いカハマルカ中期の遺跡なのか。いつか発掘調査を実施し、自分で確認したいと考えていた。

2003 年のはじめに、新しい車道の敷設によってパレドネス遺跡が破壊されそうになった。急いで文化庁に連絡して、問題の解決を図ってもらった。タイミング良く道路建設の予算が途切れ、遺跡の中心部に道路が到達する前に、工事は中止となったが、いつ破壊されるか分からなかったため緊急に調査が必要であった。

以上のような目的で、2006 年 8 月 25 日から 9 月 15 日まで発掘調査を実施した。草刈りと土め戻しを含め約 3 週間という短期間の調査であったが、非常に実りの多い調査であった。

発掘調査の結果、パレドネスがカハマルカ中期の遺跡であることが確認された。しかし、パレドネスはカハマルカの人々が標高の低い温暖な地帯を開発するために利用された拠点であると単純に解釈することはできない。というのもカハマルカ文化の土器だけでなく、様々な文化起源の土器が出土し、何よりもカハマルカ盆地には認められないチュルパが確認されているためである。

次に発掘の概要を記したいと思う。

2. 発掘の概要

パレドネス遺跡は川沿いの斜面に位置する遺跡で、遺跡全体の広がりには約 10 ヘクタールある (図 2)。建築物が集中しているところは、大きく 3 つの地区に分け、南から北に向かって A 区、B 区、C 区と命名した。発掘を始める前に遺跡を踏査し発掘箇所を選定した。出土土器から判断す

¹ チュルパとはアンデス考古学で一般に用いられる、地上式の墳墓を指すアイマラ語の単語である。窓を有し、集合墓であり、インカ期のものが最も有名であり、ティティカカ湖周辺のシリユスタニ遺跡などが有名である。本稿でも、地上式の塔状の建築物で、内部の大きさが一辺 2m 以下で、窓を有するものをチュルパと記述することにする。内部、あるいはその周辺から人骨、副葬品が出土するという状況証拠に基づき、チュルパが埋葬用の建築であると考えられる。

れば、建築物は全てカハマルカ中期 B、C に建設、利用されたと考えられる。

2-1. A 区の発掘

A 区では壁の白い上塗りの残る小部屋状構造 (R-A1、R-A2) 周辺をまず発掘区として選定した。この部分の調査を終えた後、より南西にある大きな部屋の内部 (R-A4) を調査した。いずれも建築の構造の解明と建築に伴う遺物の収集、および建築の改修プロセスの把握を目的とした。

層位的証拠と、また壁の接合面の観察に基づき、いくつかの建築プロセスがあることが明らかとなった。また、最後の建築時期に埋葬建築 (チュルパ) が建設されたことが判明した。

2-1-1. R-A1, 2, 3 (図 3)

2 つの小部屋状構造 (R-A1、R-A2) が通路の両脇に配置されている。R-A1、R-A2 はともに外側は 220 x 280 cm の大きさであり、内部は R-A1 が 125 x 190 cm、R-A2 が 120 x 175 cm の大きさである。その間には幅約 90 cm の通路があり、床面は明褐色で漆喰が張られている (図 14)。南側の壁の地表から約 100 cm の位置に横方向に切れ目があるため、窓があった可能性がある。つまり一種のチュルパ (地上墳墓) であったのではないかと考えられる。周辺の排土中に人骨が多く含まれていたことが状況証拠の一つである。また R-A2 内側には白色漆喰が塗られていた痕跡がある。R-A1 の南側には長径 100 cm ほどの楕円形の範囲に焼土、灰の集積が確認できた (図 13)。

R-A2 の東側に位置する R-A3 は、外側が 350 x 460 cm、内側が 260 x 360 cm の大きさである (図 15)。ただし壁の基礎部分とその上の部分の壁がずれているため、一度改修されている。R-A3 の南側には奥行き 140 cm のテラス状構造があり、幅 70 cm の出入口によって R-A3 と繋がっている。R-A3 の内部は出入口よりも約 40 cm ほど低い。

南側のテラス上の入口には、大きさ 50 x 60 cm、厚さ 15 cm の大きさの石臼が確認された。床面より高い位置にあるため、放棄時に置かれたと考えられる。また、石臼よりも 150 cm 東の位置には、50 x 70 cm の大きさの平石で囲まれた構造物があり、おそらく炉であると考えられる。

興味深いのは R-A3 の放棄の状態である。床面の上に大量の土器、石器、そして金属器が確認できた (図 15)。最も注目すべきは棒の先につける長さ約 30 cm の金属製の道具である (図 66)。先端が角張っており、儀礼用の槍の先端ではないかと考えられる。また内部には直径約 130 cm の炉が確認されている。また敲打具と考えられる石器や、斧形石器も確認されている (図 67)。それまで使用していた道具を一気に捨てたような、非常に儀礼的な行為であると考えられるが、これはパレドネス遺跡の性格を考える上でも重要である。

建築プロセスは次のようにまとめられる。

- 1) R-A3 の基礎部分と AM-1 が建てられる。R-A3 の出入口はどちら側にあったか不明である。
- 2) AM-1 に AM-2 と AM-5 が付け足され、R-A3 に AM-6 と AM-7 の延長が付け加えられ、南にコの字状に開いた形となる。また AM-13 が建てられ、テラスを構成する。このテラス上には炉が確認されている。
- 3) AM-3、AM-4 が付け足され R-A1 が、AM-8、AM-9 が立てられ R-A2 が完成する。R-A1 の

南側に灰の集積が確認されている。この二つはおそらく埋葬建築として利用された。また AM-13 の高さが約 35 cm 上がり、R-A3 が埋められた。

2-1-2. R-A4 (図 4)

R-A4 は外側が 8.8 x 9.8 m、内側が 7.5 x 8.5 m の大きさの空間で、R-A1、R-A2、R-A3 の南西方向に位置する (図 16; 図 17)。いくつかの建築プロセスの結果、最終時期には部屋内部の高い部分に方形の構造 (Est-A1) が設置されたことが確認された。Est-A1 は 1.3 x 1.6 m の大きさで、入口は西にあったと考えられる (図 19)。基礎部分を確認したのみで、高さや窓の有無は不明である。その周囲の排土から人骨、ビーズ (図 64)、金属製留めピン (図 65) などが出土したこと、また外側南の床面のレベルから後述する人面象形土器 (図 40) が出土したことから、地上式埋葬構造であったと考えられる。

R-A4 の建設プロセスは次のようにまとめられる。

- 1) R-A4 の最も外側の壁である壁 AM-3、AM-4、AM-6、AM-9 及びその内部の壁である、AM-1 が建設される。AM-4 と AM-6 が組み合わさるコーナーで床面が確認されている。AM-6 の中央部は開いている。
- 2) AM-6 の中央部が土留め壁で閉じられ、内部が赤褐色の砂利で埋められる。この砂利は AM-7 によって留められているため、AM-7 も同時期に立てられたことは明らかである。ただし南側には段差があるのみで、この砂利を留める土留め壁や、スロープ (rampa) になっていた証拠は確認されていない。この段階で R-A4 内部は一段高いテラス状の部分と低い部分に分かれており、一段高いテラス状の部分は 4.3 x 4.6 m の大きさである。また AM-8 と AM-10 が AM-1 に付け足される。この段階で R-A4 へのアクセスは南東側にある。
- 3) R-A4 内の高い部分に Est-A1 が建設され、その東側に AM-2 が立てられる (図 18)。
- 4) R-A4 の東側に大きな構造物ができ、その西壁である AM-5 によって R-A4 は閉じられ (図 18)、内部へのアクセスはなくなる。この段階で Est-A1 の西の部分が拡張された可能性がある。

2-1-3. Est-A2 (図 5)

Est-A2 は遺跡の最も南西の地区に位置する建築である (図 20)。6 x 7 m の大きさで南東側出入口を有する。斜面に建てられており、東コーナーでは岩盤が床面よりも高い位置で露出している (図 21)。また、西コーナー部分が崩れ落ちており、そちらにアクセスがあったかどうかは不明である。中央にチュルパが位置し、外面は 2.6 x 2.6 m、内部は 170 x 175 cm の大きさで、東側に幅 75 cm の出入口を有し、高さは少なくとも 70 cm 以上ある。内部の床のレベルは外部よりも 20 cm ほど低い。

チュルパ内部から出土した人骨はあまり多くない。また、ビーズが数点出土したが、その他の目立った遺物は出土しなかった。チュルパの周囲の排土からはスポンディルス貝の破片などが出土している。また、北コーナーには大量の遺物を含む灰層が 1.0 x 2.7 m の範囲に亘って分布しており、そこからは獣骨や石臼 2 点などが出土した。北東の壁際には獣骨の集積が確認されている。こうした証拠から、Est-A2 は後述する Est-B1 と同様に複合的な埋葬構造であることは明らかである。

Est-A2 は一連の構造物の一部である。その南西方向に位置する構造物 Est-A3 は内部が 2.3 x 2.8 m 以上の大きさである (図 22)。その南西方向にはさらにチュルバがあると考えられるが、今回は未発掘である。

2-2. B 区の発掘

B 区は A 区よりも北に位置する。フアン・ウガスはこの B 区を便宜上二つに分け、高い部分を B1、低い部分を B2 と命名した (Ugaz 1999)。しかし提示された図面は B 区の全ての区域の建築物を網羅しておらず、その区分の基準も曖昧であるため、今回 B1、B2 という区分を採用しなかった。

B 区が一番低い部分、つまり川沿いの箇所には狭い範囲に方向の異なる建築物が集中している。これは全ての建築がほぼ同じ軸に沿って建てられている A 区とは違う特徴である。そこで、建築の方向軸の違いが時期差を示しているという想定で、方向の異なる複数の建築物を含むようにトレンチを設定した。そしてそれぞれの壁の根の深さ、アクセスの方向の違い、壁の接合面などに注目し、建築の時期差を解明しようと試みた。

以下、それぞれの建築物の特徴を記述したい。

2-2-1. R-B1, B2, B3, B4 (図 6)

建築プロセスを調べるためにトレンチを 4 つ設定した。

R-B2 の南の壁は不連続であり、東の部分が古いことは明らかである。即ち、壁 BM-1 が先に立てられ、次に土留め壁 BM-2 が付け足された。次に BM-2 に壁が付け足され、R-B2 と R-B1 が建設された。内部からは大量の土器片が出土した。R-B1、R-B2 は内部の南側が一段高いベンチ状構造となっており (図 23)、奥行きは約 130 cm ある。R-B1 と R-B2 は幅 75 cm の出入口で繋がっており、床面の高さはほぼ同じである。R-B2 の北にアクセスがあり、幅 75 cm で 1 段ステップを下って外部と繋がっている。一方、R-B1 に直接入るアクセスは確認されていない。R-B1 の平面形は台形であり、R-B2 の形もいびつである。両部屋状構造から大量の土器片が出土している。

R-B3 は西コーナーを確認しただけであるがおそらく BM-1 に付け足され、あるいはそれに平行するように建設されている。そのため R-B3 の建設時期は BM-2 と同様、BM-1 よりも後である。コーナー部分からは円形の炉が 3 つ確認されているが、石で区画されておらず、浅くレンズ状に灰が詰まっていただけである (図 24)。

R-B4 も建築の軸がほぼ同じであるので、R-B3 と同じ時期であると考えられる。南コーナーを発掘したが、建築に目立った特徴は認められなかった。

まとめると次のように建築時期は 2 時期に分かれる。

- 1) BM-1、R-B3、R-B4、BM-2 が建設される。
- 2) R-B1、R-B2 が建設される。

2-2-2. R-B5 (図 6)

部屋状構造の比較検討をするため、B 区の最も南に位置する R-B5 を発掘対象として選定した。内部は 6.0 x 4.5 m の大きさで、北西側に幅約 90 cm のアクセスがある。建築に目立った特徴はなく、

出土遺物も特に多いわけではない。

2-2-3. Est-B1 (図 6)

内部の大きさが 5.5 m 四方のほぼ方形の低い基壇状構造で、複合的な埋葬施設である (図 25)。出入口は北東側にあり、西側が崩壊しているため正確な幅は不明であるが、85 cm 以内である。中央部にチュルパが位置し、内部の大きさは 145 x 135 cm であり、出入口は幅 40 cm であり、高さは床から少なくとも 55 cm 以上ある。またチュルパ内部の床は外の床よりも 13 cm 低い。

Est-B1 の南には方向の異なる壁 BM-3、またそれに直行する短い壁 BM-4 があり、二本の壁の根の深さはほぼ同じであるため、同時期に建設されたと考えられる。その後、BM-4 を切り、その北東側に Est-1 が建設され、BM-4 の東側に灰が敷かれ、その中に猫科動物が 2 体埋められた (図 32)。明らかに儀礼的な埋葬である。Est-B1 の壁の根は灰層や、他の 2 枚の壁よりも高い位置にある。埋葬構造 Est-B1 は、BM-3、BM-4 よりも後に建設されたことは明らかである。

Est-B1 の東側には口縁部が欠損した半完形の大型の壺が埋め込まれていた。猫科動物を覆っている灰はこの壺まで広がっていることが確認できた。

Est-B1 内部からは様々な奉納、埋葬が確認された。

東コーナーからは複数の土器が出土した (奉納 B1; 図 26)。その中にはティワナク文化のケロ形土器と器形が類似した上げ底の土器が 3 点含まれていた (図 41-43)。全体が黒色、または暗褐色で、文様は施されていない。他には灰色のコップ付き人物象形土器などが確認されている (図 44)。

また南のコーナーには石で区画された 80 x 100 cm の広さの空間があり、内部からは大量の人骨が出土した (BTM-1; 図 27)。全て二次埋葬であった。頭骨と大きめの骨の位置を図面に落としした後、頭骨は後で接合するため一つずつ、その他の骨はまとめて取り上げた。番号を振って取り上げた頭骨は 13 ある。また BTM-1 の北東からはケロ形土器の破片と、一般に海岸カハマルカと呼ばれる完形碗が出土した (図 45)。ケロ形土器の破片は奉納 B1 の土器片と接合した。ケロ形土器の原位置は不明であり、チュルパ内部にあった土器が取り出されて置かれた可能性もある。推測の域を出ないが、BTM-1 の人骨もチュルパ内部にあった遺体を取り出され、置かれたものかもしれない。しかしパレドネス遺跡で確認されている他のチュルパはこのような構造物を伴っていない。

また西コーナーにも同様に人骨の集積が確認された (BTM-2; 図 28)。石壁で区画されており、内部は周りよりも低い。入口は東にあり、幅は 40 cm、入口のステップの石から底部まで約 50 cm の深さがある。底部は隅円方形で、85 x 75 cm の広さである。BTM-1 と同様に、頭骨の一つずつ、その他の骨は一括して取り上げた。番号を振って取り上げた頭骨は 23 ある。内部からは針や留めピンなどの金属製品 16 点、土器 1 点などが出土した。

BTM-2 の出入口のステップ上で頭を西に向け、背中を下にした状態で座位屈葬の遺体が 1 つ検出された (図 29)。副葬品はなかった。二次埋葬の人骨と同様に他の場所から移動させられたか、あるいは遺体を覆う土が非常に硬かったため、内部の二次埋葬よりも前の時期のものである可能性がある。

チュルパの北西の壁際には平石を立てて組んだ炉が確認された (図 30)。石がおそらく熱を受けヒビが入っており、また内部から灰が確認されている。またチュルパの南東側の壁際の床下からは四つ足動物が確認された (図 31)。全長 55cm で、頭は南西、足は北東を向いている。動物の種類

は不明である。

チュルパ内部は空であったが、その北東の出入口の外側の排土からは大量の人骨が出土した。また、頭飾りの一部である金属製品（図 68; 図 69）や細かいビーズも出土している。チュルパの内部にあった埋葬に伴うものであろう。

2-2-4. Est-B2（図 6）

Est-B1 の西側に位置する構造物である（図 33）。Est-B1 と異なり、外部構造を伴わない単独のチュルパである。内部は 140 x 145 cm、外部は 210 x 230 cm の大きさである。内部の床は外側よりも 30 cm 低い。入口は北東側にあり、幅は 70 cm、高さは少なくとも 50 cm 以上ある。また出入口が閉じられていた痕跡が確認されている。

チュルパの内側からは人骨や遺物は殆ど出土しなかった。外側では入口の南東側に完形土器が 8 点確認された（奉納 B2; 図 34）。多くは口縁が外反する丸底、あるいは尖底の壺であった（図 61）。しかし全てが床面直上にあったわけではなく、かなり高い位置で確認されたものもあったため、本来チュルパ内部にあったものが、外側に置かれたという可能性がある。

また、外側の西コーナー付近からはペルー北海岸系の壺の破片が出土したが、本来は内部にあったものであろう。他には中央に帯状文様を伴う橙色コップ形土器（図 60）が出土している。

2-2-5. Est-B3（図 7）

Est-B1 の東に位置する。Est-B2 と同様に、外部構造を伴わない単独のチュルパである（図 35）。内部の大きさは 210 x 170 cm で東西方向に長い。入口は東にあり幅 40 cm で、内床は外床よりも 35-45 cm 低い（図 36）。他のチュルパは床面の高さに入口（窓）があるが、Est-B3 の入口は床面より 25 cm 以上高い位置にある。

内部からは大量の人骨が出土したがいずれも原位置を保っておらず、明らかに二次埋葬である。また金属製の留めピン 3 点、貝製品 5 点、赤色の扁平な水筒形壺が一点出土した。

埋葬構造である Est-B2、Est-B3 は単独で立っているため、切り合い関係から建築時期を比定することはできないが、Est-B1 と同様に最終時期に建設されたと想定している。Est-B2、Est-B3 はそれぞれ独立して機能したのか、あるいはそれよりも規模の大きい Est-B1 とセットで建設され、それらの間で差異化が図られたのかなど詳しいことはよく分からない。また、Est-B3 と Est-B1 の入口は Est-B2 と Est-A2 よりも狭いが、この違いが何に対応するのかは不明である。

2-2-6. R-B8（図 8）

Est-B3 の北側の低い箇所に位置する、B 区の北東端の部屋状構造物である（図 37）。内部の大きさは 4.3 x 7 m である。東側の端を 2 m 幅のトレンチを設定して発掘したが、北コーナーが崩壊しており、そこにアクセスがあったかどうかは不明である。

内部から特に目立った遺物は出土していない。R-B5 の出土遺物と比較しても、B 区における建築の時期差や、建築の機能差はよく分からない。

2-2-7. R-B6, R-B7 (図9)

B 区の北西の低い場所に位置する建築群と比較するために、南東側のより高い場所を発掘した。部屋の内側の壁に 5 x 10 cm、10 x 10 cm、10 x 15 cm という大きさの小壁龕を伴う R-B6 と、それよりも東の高い位置にある R-B7 の一部を発掘した (図 38)。

R-B6 は 4.7 x 1.6 m の大きさの南北に長い長方形の部屋状構造であり、西側のほぼ中央に 2 段ステップの出入り口が位置する。内部の北コーナーに 130 x 75 cm の広さの石で区画された空間があり、その内部には男根を模したと思われる加工された石が立てられていた (図 39)。またその付近からほぼ同じ形をした小さい石が出土した。

R-B6 の北東コーナーには盗掘坑があり壁の一部が破壊されていたため、当初は東に隣接する R-B7 と R-B6 の間にアクセスがあると想定していたが、2 つの部屋状構造の間にアクセスはないことが確認された。また、R-B6 は R-B7 に付け足されて建設されているため、建設時期は後である。

R-B7 の平面は台形である。北東-南西方向の長さは 5 m、北の壁は約 4 m、南側の壁は 3 m ある。入口は北側にあり幅は 60 cm である。内部の北コーナーを掘り下げたが目立った建築の特徴や遺物は確認されていない。

R-B6、R-B7 の二つの部屋状構造は大きな建築コンプレックスの一部であるが、全体の中での位置づけは現在のところ不明である。

A 区は比較的規模の大きい建築物が明確な設計図にしたがって建設され、B 区では小規模建築が不規則に広がっている。この違いが、機能差か、時期差か、あるいは利用した人々の違いに対応するのはよく分からない。C 区ではチュルパが単独で立っており、他の建築物はあまりなく、A、B 区とは異なる特徴を示している。

一方、建築プロセスの最終段階に埋葬建築ができるのは A 区と B 区の共通したパターンである。これは遺跡の性格の変化を示していると考えられるが、祖先崇拝は先スペイン期アンデスでかなり広範に認められる特徴であり、日常生活の空間の中に墓があることは珍しくはない。

3. 土器の予備的分析

パレドネス遺跡では 18764 点の土器片が出土し、そのうち 1722 点は口縁部であった。口縁部のみをタイプ分類したが、その半分以上は Cajamarca Coarse Red 系の土器であった (図 63)。従って、パレドネス遺跡の利用者の多くはカハマルカ文化の人々であったと考えられる。それに次いで多いのはペルー北海岸系の大粒の砂状混和材を含む胎土の土器である。ここでは出土遺物のうち代表的なものを紹介したい。

3-1. カハマルカ文化の土器

カハマルカ文化はカオリン土器製作によって特徴づけられ、その特徴に基づきカハマルカ早期、前期、中期、後期、晩期の 5 時期に区分されている (Terada and Onuki, eds. 1982; Terada and Matsumoto 1985)。筆者はカハマルカ中期を、Cajamarca Classic Cursive が製作されたカハマルカ中期 A (A.D. 550/600-700)、Cajamarca Floral Cursive が製作されたカハマルカ中期 B (A.D. 700-800)、Cajamarca Floral Cursive の胎土が粗くなり、碗が大型化し、三脚が登場するカハマルカ中期 C

(A.D. 800-900) の 3 時期に細分している (渡部 2005; Watanabe ms.)。この編年に従えばパレドネスが利用され始めたのはカハマルカ中期 B である (図 46-51)。また、Est-B1 や R-A4 などチュルパに共伴するコンテキストで Cajamarca Floral Cursive の三脚付き碗 (図 52-57) が出土しているため、チュルパが建設されたのはカハマルカ中期 C である。また後述するカハマルカ文化以外の土器の多くはチュルパに共伴して確認された。

パレドネス遺跡の調査の結果、これまで時期が曖昧であった土器の編年上の位置づけが明らかになった。これまでタイプ名がつけられていなかったため、Cajamarca Red Painted² というタイプとして設定した (図 58; 図 59)。橙色、あるいは褐色の胎土の土器で、その上に赤色で直線、波線などで文様を描くのが特徴である。高台付あるいは平底の碗が主な器形で、文様は内部に施される。筆者等が 2001-2002 年に調査を行ったバーニョス・デル・インカ遺跡は、Cajamarca Classic Cursive が製作されたカハマルカ中期 A に時期比定されるが、ここでは Cajamarca Red Painted は出土していない (渡部 2005)。一方でパレドネス遺跡で Cajamarca Floral Cursive と共伴して出土することからカハマルカ中期 B の土器であることは明らかである。カハマルカ中期 C、カハマルカ後期に製作されたかどうかは不明であるが、カハマルカ晩期のサンタ・デリア遺跡からは出土していない (渡部 2004b)。この類似した土器はヘケテペケ川下流に位置するサン・ホセ・デ・モロ遺跡でも出土しており、カティウシャ・ベルヌイとバネッサ・ベルナルはワカロマ遺跡の発掘報告書を引用し (Terada & Onuki, eds. 1982: Plate 105-6)、それを Cajamarca Classic Cursive に分類しているが (Bernuy & Bernal 2005)、全く別タイプの土器である。

次にカハマルカ文化以外の土器をいくつか紹介したい。

3-2. ティワナク文化的土器

今回最も理解に苦しむのはティワナク文化の土器に類似した土器の存在である。Est-B1 では 3 点のケロ形土器が確認されている (図 41-43)。黒色から暗褐色の非常に磨きの良い、口縁が外反するコップ形土器で、上げ底で、底部の空間は閉じられている。ティワナク文化のように多彩色で施文されておらず、単色の土器で、中央部が帯状に隆起している。また 2 点は細身で 1 点は太めであるが、細めのケロ形土器は口縁部下に突起を 5 つ伴っている。太めの土器には突起はない。

R-A4 内の Est-A1 に共伴して出土した人面象形土器もティワナク文化的な特徴を示している (図 40)。周囲の排土から出土したものを含め、少なくとも計 6 個体分の破片が確認されている。口縁がやや角張った平底の鉢が唯一の器形である。円形、あるいはギザギザの形をした耳飾りをした人物の顔が土器の側面に立体的に表現されている。橙色の表面上に全体に赤色のスリップが施され、白、黒を用いて顔が彩色されている。表現された顔は額が盛り上がり、吊り目で、口を半開きにしており、下顎、下唇をつきだしているのが特徴である。ココなどを口に含んでいる状態を示しているように見える。また耳、鼻、顔に施された文様などには個体差が認められる。

パレドネス遺跡ではワリ様式の土器は出土していない。Est-B2 の外側から出土した橙色のコップ形土器には中央の帯状部分に刻線、刻点で文様が施されている (図 60)。多彩色土器ではないが、器形と施文帯の位置はワリ文化の土器と共通する。

² Cajamarca Coarse Red やカハマルカ早期のカオリン土器 Cajamarca Red と混同しないようにすることが重要である。

3-3. 海岸カハマルカ

カオリンを用いず、橙色、赤褐色系の胎土で内面全体と外面の口縁部付近を帯状に白く塗り、内面の上に赤色で幾何学文様を描くのが一般的な特徴である（図 45）。低い高台付の碗が主な器形である。ヘケテペケ川以北の北海岸に広く見られるため、海岸カハマルカと総称されてきたが、バタン・グランデ遺跡出土土器の中では「Sicán Painted Dishes」というタイプ名がつけられている（Montenegro Cabrejo 1997）。パレドネス遺跡では Est-B1 で 3 個体出土しているのみで、カハマルカ中期 C に時期比定される。出土数が少ないため、タイプ名はつけていない。

パレドネスはこのタイプの土器が出土するかなり山寄り（標高の高い）遺跡である。このタイプの土器は現在のところ海岸、あるいはヘケテペケ川中下流域で製作が始まったと考えられるが、今後 C14 年代を参考にし、土器タイプのクロスデイティングを精緻化して検証する必要がある。

3-4. ペルー北海岸系の土器

Est-B1 からは灰色の人物象形土器が出土している（図 44）。頭の部分が笛のように音が出る仕掛けになっており、人物は背中部分でコップと繋がっている。類似した土器はワマチューコのセロ・アマル遺跡や（Topic and Topic 1984: Figure 9, a）、カイェホン・デ・ワイラス盆地のウィルカ・ワイン遺跡で出土している（Bennett 1944: Fig.4, B）。ただし人物と繋がっているのはコップ形ではなく長頸壺である。ワリ期の埋納コンテクストで確認される典型的な土器である。

大粒の砂を混和材として用いた胎土の尖底壺（図 61）はカハマルカ文化の土器ではなく、海岸系の土器である。また同じく海岸地帯に典型的な、双注口壺も出土している。

他には A 区の R-A4 内で人面を表現した内湾碗などが出土している（図 62）。こうした複数の文化の土器が認められる状況は、同時期の遺跡であるサン・ホセ・デ・モロと類似している（Castillo 2001, 2003）。土器様式と人間集団の間に一対一の対応関係を想定することの妥当性についての議論はあるが、土器様式の多様性はこの時期の広範囲に亘る人の動きと連動していることは間違いないであろう。

4. 考察

パレドネス遺跡はカハマルカ中期 B・C に利用された遺跡であり、その後利用された痕跡は認められない。それは中央アンデス全体の編年でいえばワリ期に対応する時期である。

一体どのような性格の遺跡であろうか。土器様式の多様性から判断すれば、ウガスの想定するようにカハマルカ盆地の人々がユンガ地帯の資源を開発するための飛び地であったとは考えにくい。筆者はワリ期に広範な範囲で人の動きが活発化し、そのなかでパレドネスも建設されたと考えている。しかしパレドネス遺跡とワリやティワナクとの関係は不明である。

また川沿いの決して利用しやすい場所ではない斜面が選ばれたのはなぜだろうか。筆者は敲打具と考えられる石器、および金属製品が多く出土することから、ここでの主な活動の一つは金属製品の製作、あるいはその原料の採集であるという仮説を持っている。工房や鋳型といった物的証拠が見つかれば、パレドネスが金属製品の製作、鉱物資源の獲得を目的として様々な集団が送られ、労働に従事した場であるという解釈の有力な根拠となる。

カハマルカ盆地では金属製品はあまり見つかっていないため、金属資源の獲得はカハマルカ文化においてはあまり重要視されなかったようだ。ワリ期という特殊な状況でその受容が高まったと想定される。

4-1. カハマルカ中期とワリ、ティワナクの関係

カハマルカ中期の *Cajamarca Floral Cursive* はワリ関連遺跡や北海岸の遺跡で広範囲で確認されている。その多くは搬入品ではなく現地製である。筆者はこれを単なる交易の結果ではなく、ワリの支配下で人間が広範囲に移動した結果であると解釈している (Watanabe 2002)。

ヘケテペケ川下流のサン・ホセ・デ・モロ遺跡では北海岸系の土器のみではなく、ワリ文化、カハマルカ文化、中央海岸系の土器が混在している (Castillo 2001, 2003)。カハマルカ盆地とサン・ホセ・デ・モロを繋ぐルートは当然ながらヘケテペケ川沿いであり、その流域に位置するパレドネス遺跡のデータは非常に興味深い。

現在のところ筆者は、パレドネスはカハマルカがワリの支配下にあった時期に利用が始まった遺跡であり、ワリの北高地からの撤退と共に放棄されたと想定している。最終時期に建設されたチュルパにティワナク的な土器が共伴することは興味深い。ワリの勢力が弱まった地域にスポット的にティワナクが入り込んだということを示しているのであろうか。

カハマルカ盆地にはミラフローレスというワリの大遺跡がある (レンブレラス 1977[1974]: 181; Watanabe 2002)。残念ながら現在の村の下に埋もれているが、明らかにワリ文化の建築の壁や切石が散らばっている。この遺跡を発掘すればカハマルカ地方におけるワリの存在の実態、そしてパレドネス遺跡の位置づけが明らかになるであろう。

これまでカハマルカ地方ではティワナク文化の遺物は、筆者の知る限り確認されていない。一方で島田泉はシカン文化におけるティワナクの影響を認めていた (Shimada 1995: 165-170)。パレドネスのデータはティワナクとペルー北海岸を結ぶ間接的な証拠として重要である。

現在ワリの勢力範囲とティワナクのそれはペルー南海岸のモケグア谷で重なり合う以外は、大まかに分かれるという解釈が有力であるが、事態はそれ程単純ではなさそうである。ウィリアム・イズベルはワリ遺跡モラドゥチャユック地区で切石でできた半地下式広場を発掘し、ティワナク遺跡の建築との類似性から、それはアルティプラノから連れてこられた石工によって作られたという仮説を提示している (Isbell 2001: 124)。ワリの支配下でティワナクの人々が移動させられること、あるいはその逆も作業仮説として念頭に置く必要がある。

いずれにせよカハマルカ文化を独立した存在として扱うのではなく、中央アンデス全体に起こった動きと連動させて解釈する必要がある。

4-2. チュルパの問題

今回、ワリ期の遺跡であるパレドネスでチュルパの存在が確認された。問題はこの習慣がどこから導入されたかである。少なくともカオリン土器が製作されたカハマルカ盆地では同様のチュルパは確認されていない。またワリ遺跡やティワナク遺跡にはチュルパは存在しない。ペルー南部、ボリビア、チリ北部でチュルパが出現するのは後期中間期の 13 世紀以降であり (Pärssinen 2003)、ペルー北部高地ではそれよりも少なくとも 500 年古い時代に建設されている。

出土土器からチュルパの起源地を想定することは難しく、おそらくチュルパと土器様式を一対一で対応させること自体が不適切であり、それぞれ独立させて考えるべきである。もしカハマルカ地方の外から導入された習慣ならば、土器様式からは識別できない民族集団の存在を想定することも必要であろう。

チュルパは明らかに外来の特徴であるが、その起源の候補としていくつか考えられる。一つはウィリアム・イズベルが主張するように、カハマルカ地方の北のチョタ、クテルボ地方である (Isbell 1997)。イズベルは同地方のチュルパが地方発展期初期まで遡るといっているが、その時期同定の根拠はチュルパの石組みの石彫の図像のみであり、決定的な証拠ではない。ルットウ・シャディーとエルミリオ・ロサスは石彫は再利用されたものであり、チュルパ自体は後期中間期のものである可能性を示している (Shady y Rosas 1976)。また、同地方には Cajamarca Floral Cursive が出土していることから (Shady y Rosas 1977)、パレドネスと同様にワリ期に他の地域からもたらされた可能性を考慮すべきである。

筆者は現在のところ、チュルパはカハマルカよりも南から導入された習慣であると考えている。候補の一つはカエホン・デ・ワイラス盆地であり、そこでは少なくともワリ期には確実にチュルパがあることは確認されている (Paredes, Quintana and Linares 2002)。地方発展期まで遡るのであれば、アンデス最古のチュルパとなる。しかしジョージ・ラウによればチュルパのような地上式の墳墓が現れるのは A.D. 800 年頃であり (Lau 2000: 192; 2002: 292)、それはパレドネス遺跡とほぼ同時期である。また、アンカッシュ県に位置するトルナパンパ遺跡では、チュルパ付近で Cajamarca Floral Cursive が 1 点確認されている (Kato 1979)。同遺跡のチュルパもワリ期に建設された可能性がある。

チュルパはアイマラ語の単語であるが、アイマラ語の起源は地方発展期のリマ県山地にあるというセロン＝パロミノの仮説に則れば、その地域のチュルパが最古であるという作業仮説を立てることができる (Cerrón-Palomino 2000: 378)。チュルパの起源は今後の課題である。

また、チュルパはミイラを安置するという意味で、遺体をそのままの形で保存する志向性を伴っているが、パレドネスの Est-B1 はコーナーに二次埋葬用の区画を伴う点で珍しい。Est-B3 も内部がかなり攪拌されているようであり、それが当事者によって行われたのか、あるいは外部の人間によって行われたのかは分からない。少なくとも現代の盗掘の結果ではないように思える。タンタリカでも類似した二次埋葬のコンテキストが確認されており (渡部 2005b)、先スペイン期の習慣の一つであると考えられる。

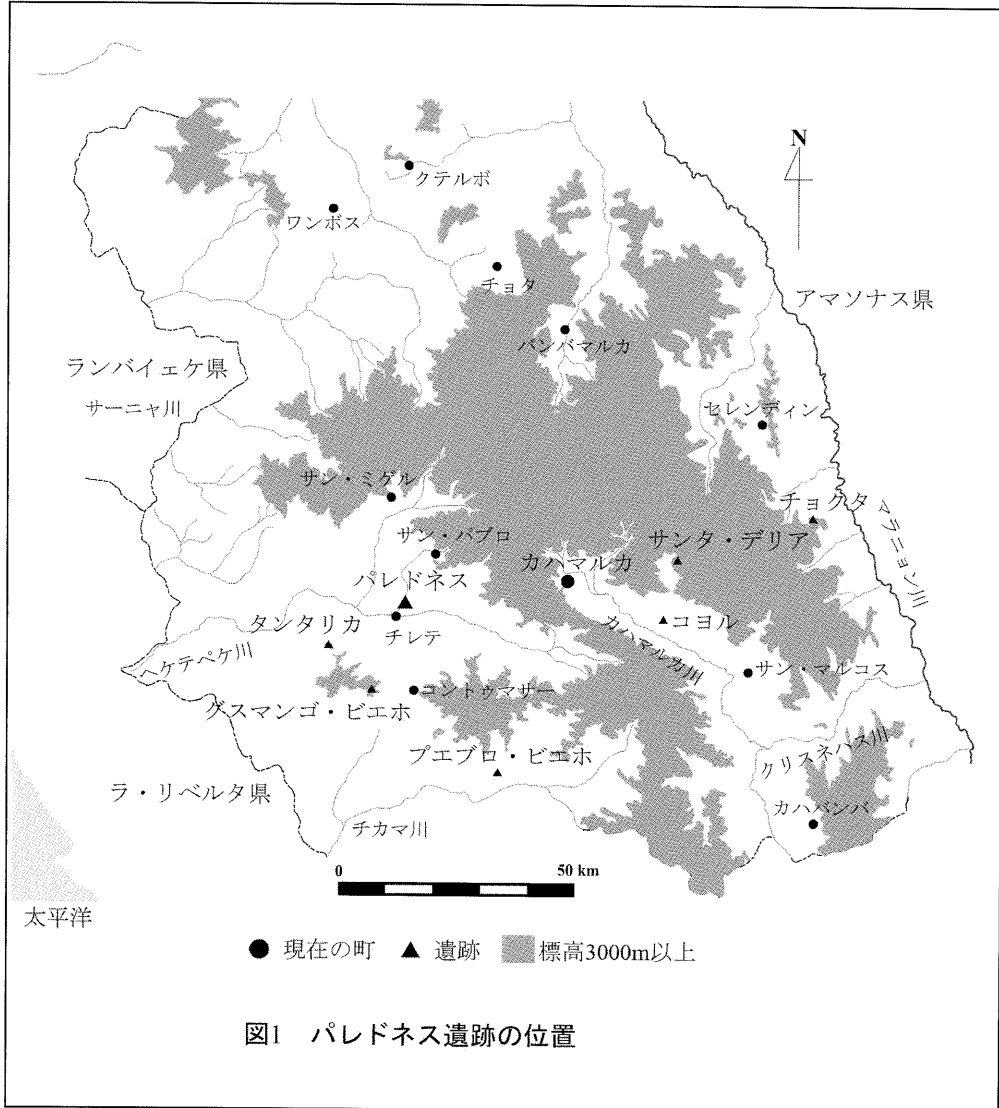
4-3. おわりに

インカ、チム一期の社会動態、そして垂直統御モデルの再検討というテーマでパレドネス遺跡の調査を立案、実施したが、調査の結果ワリ期の同時期であるカハマルカ中期 B、C の遺跡であることが判明した。建築の表面観察だけで時期決定することは難しいものである。

パレドネス遺跡の調査から新たなテーマが出てきたが、それを少しずつ明らかにしていく必要がある。チュルパの起源、ティワナクの土器の存在とワリ様式土器の欠如、海岸カハマルカの問題など、興味深いテーマばかりである。また、同時代の遺跡間の土器構成の比較も課題として残されている。ということでしばらくはカハマルカを離れることはできない。

【謝辞】

本稿は、2006年度科学研究費補助金（若手研究（スタートアップ））、南山大学2007年度パッヘ研究奨励金I-A-2による研究成果である。



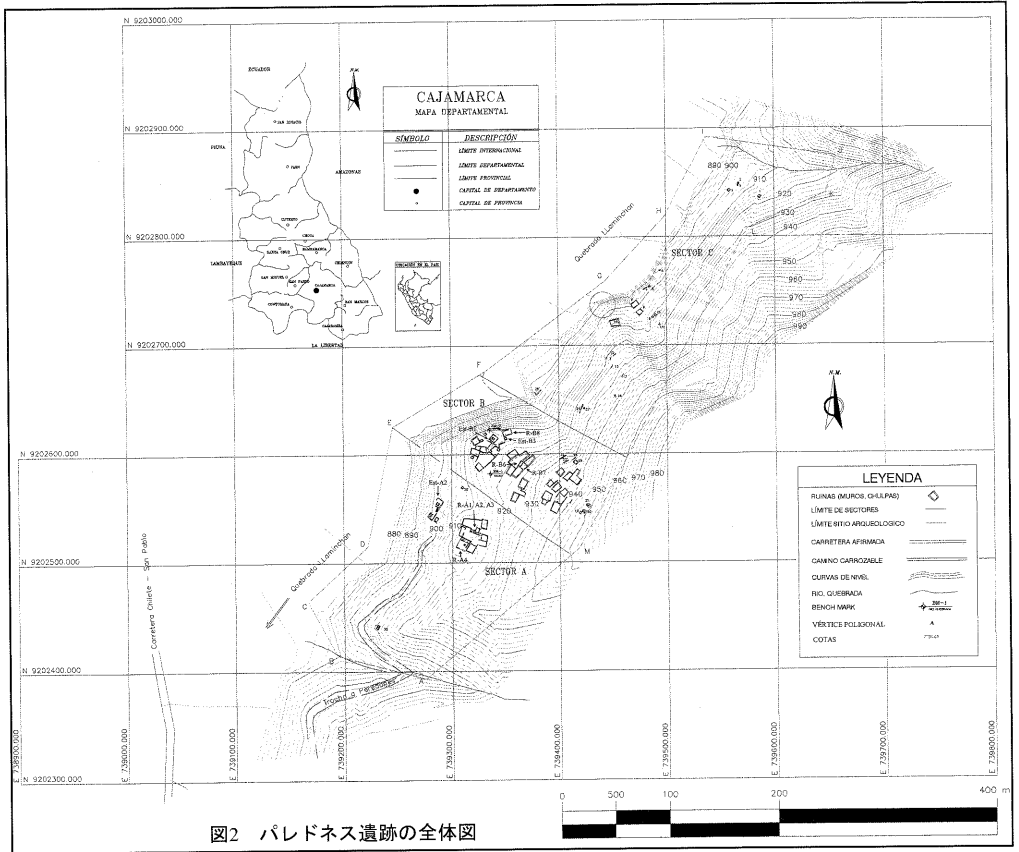


図2 パレドネス遺跡の全体図

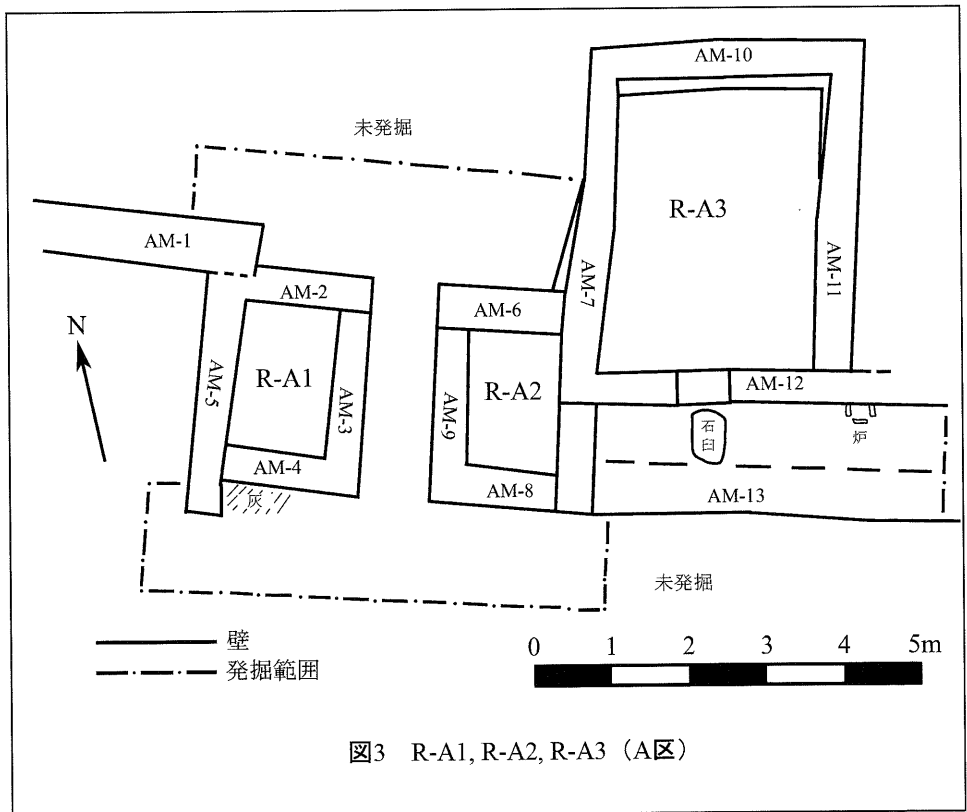
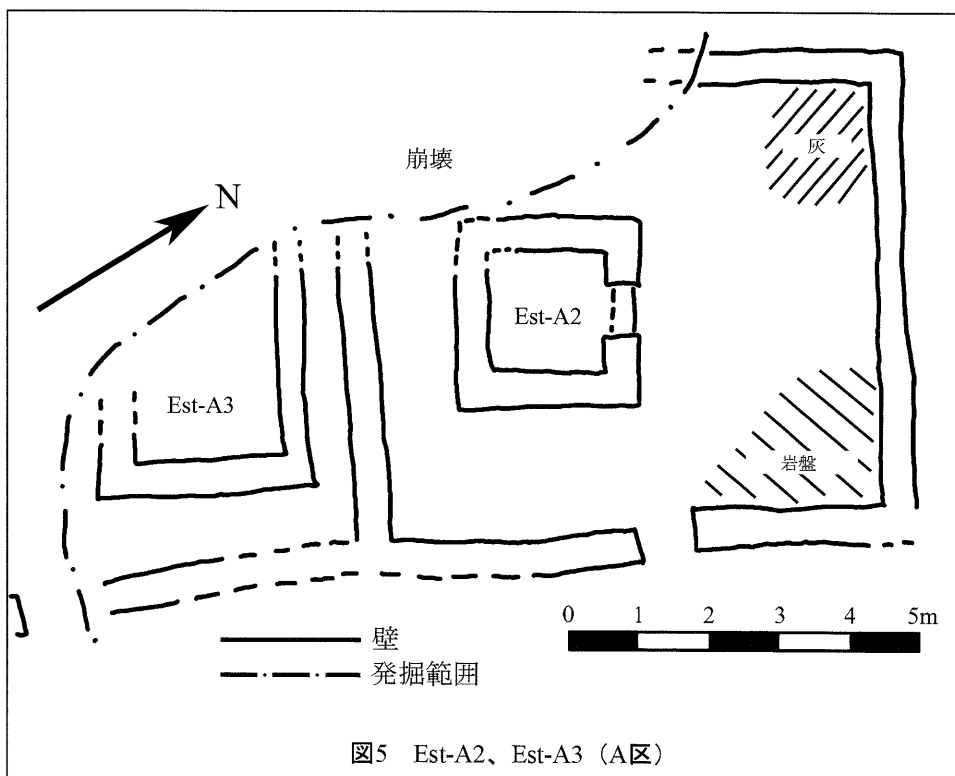
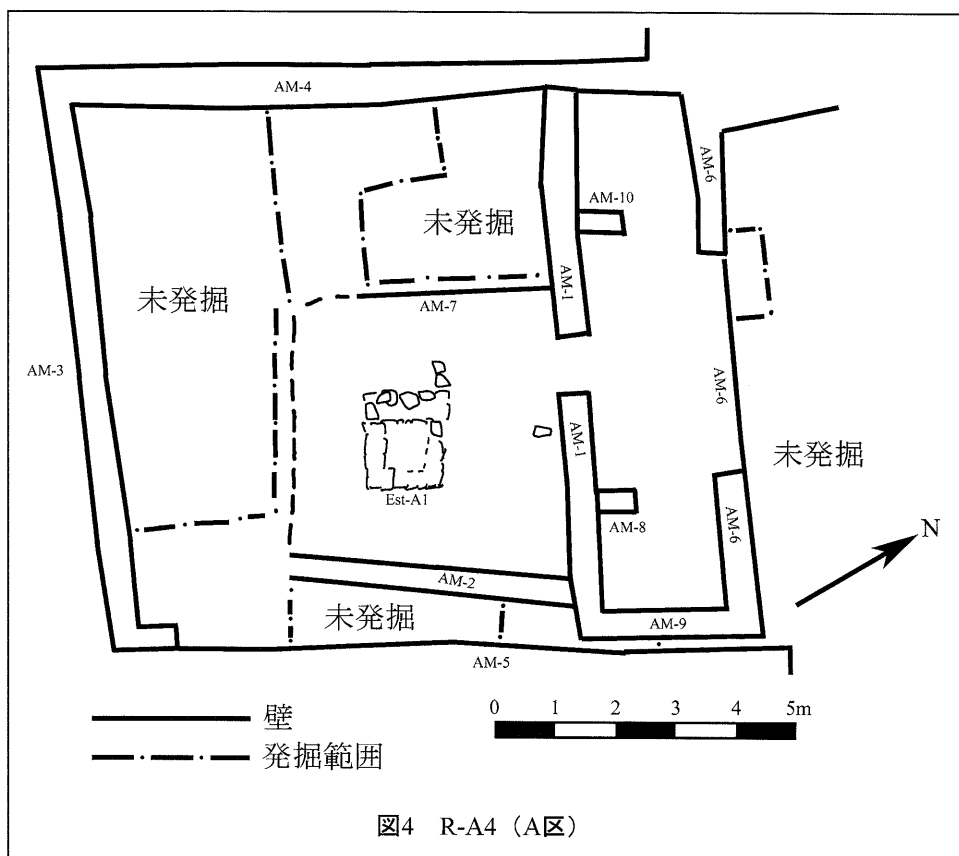


図3 R-A1, R-A2, R-A3 (A区)



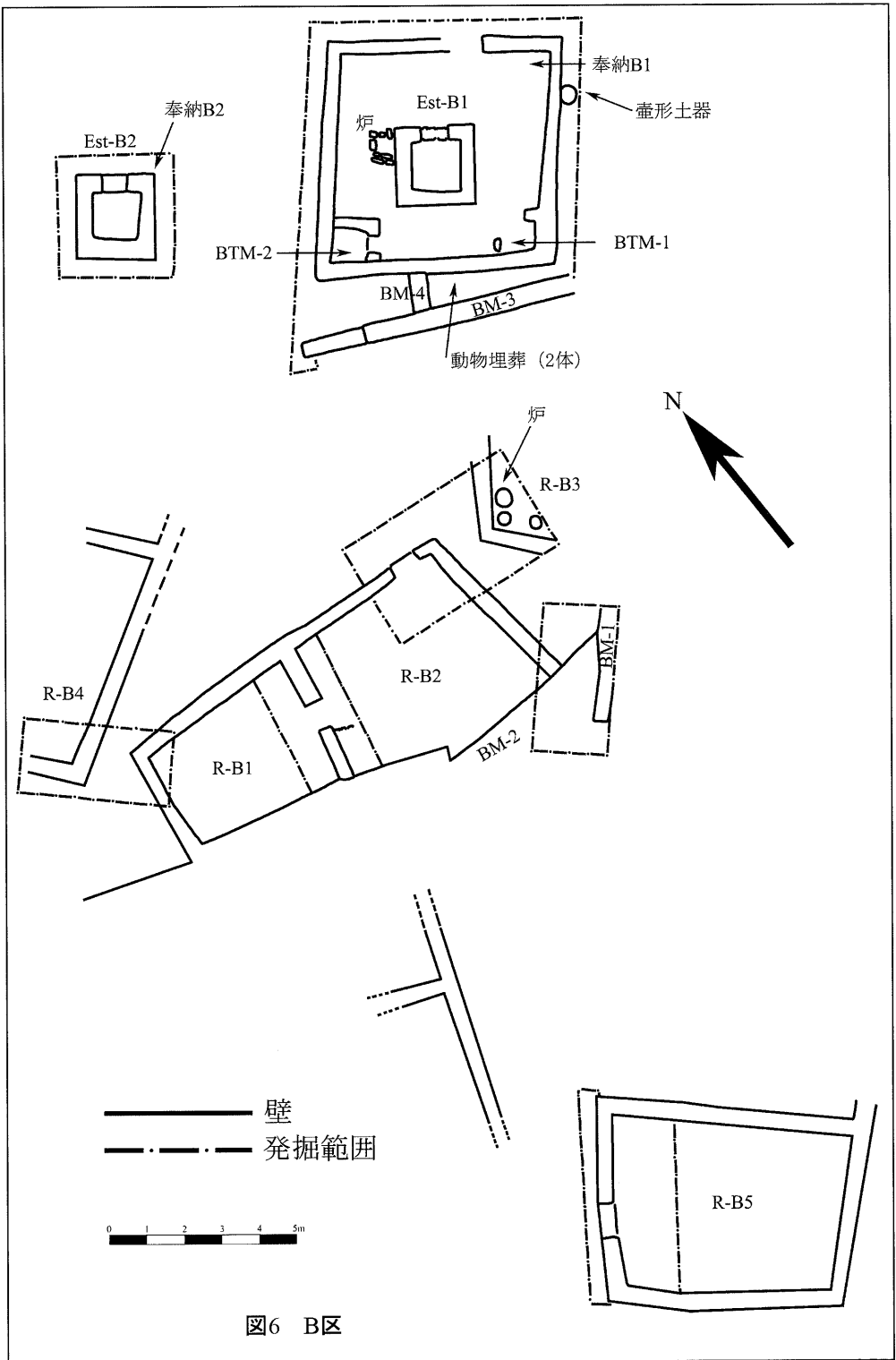
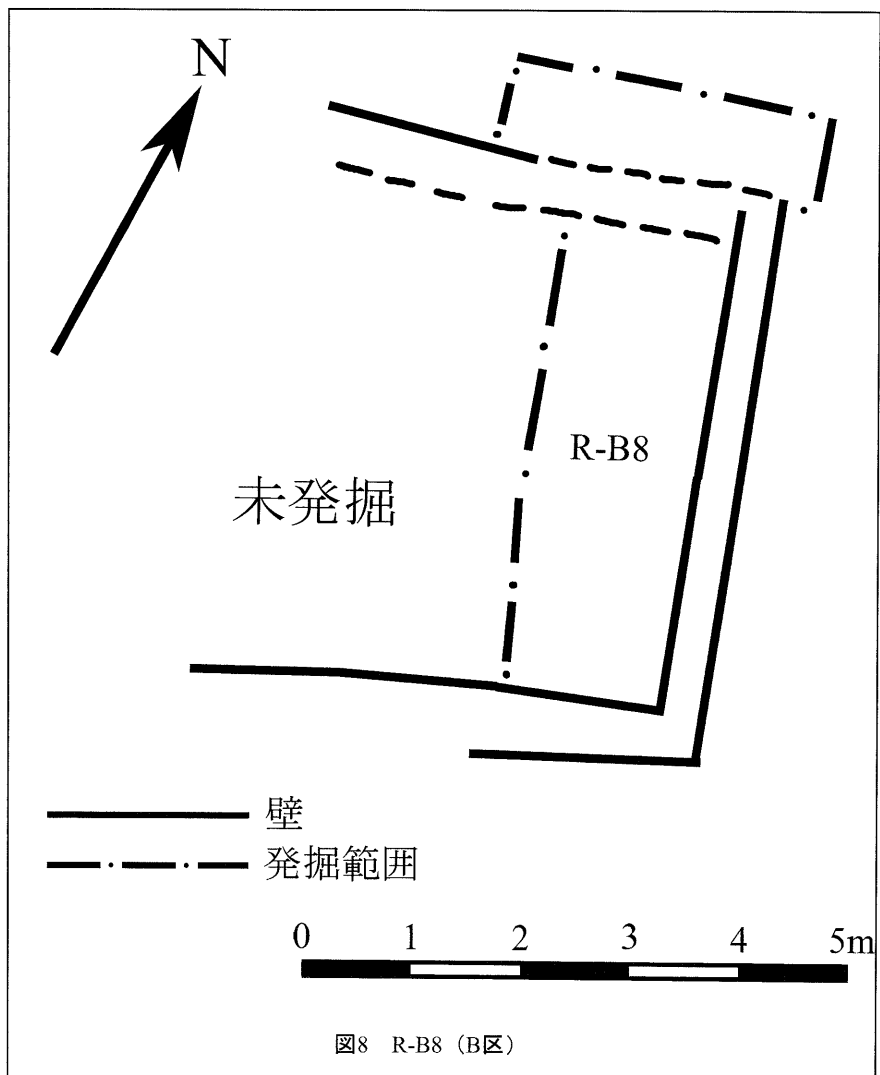
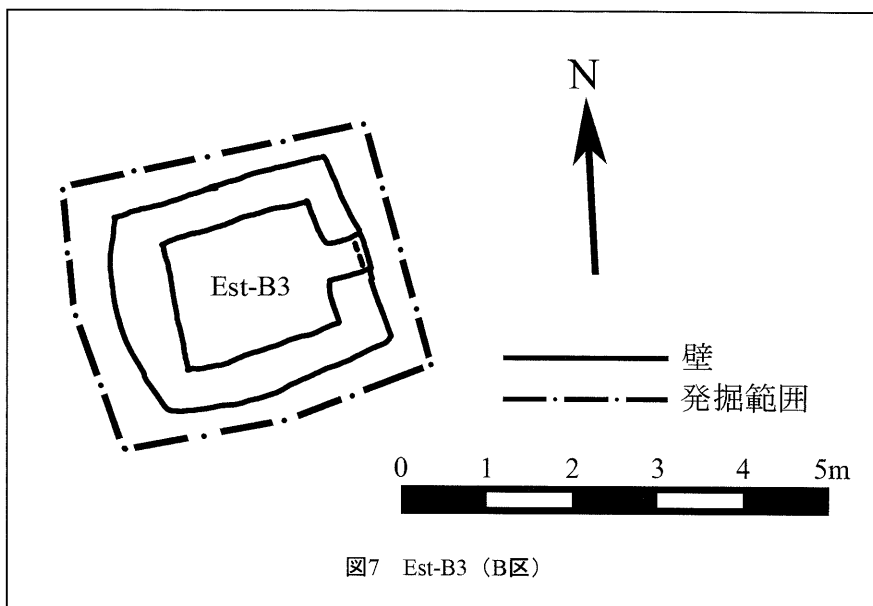


図6 B区



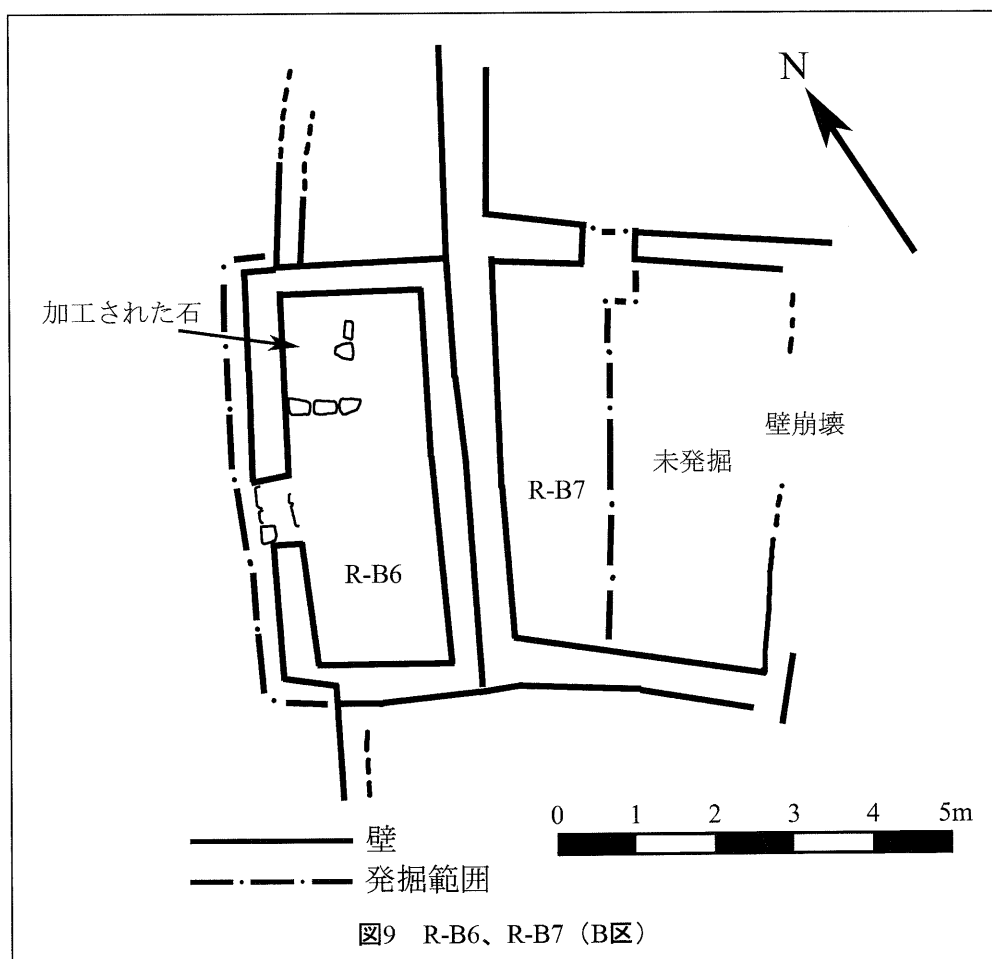




図10 パレドネス遺跡

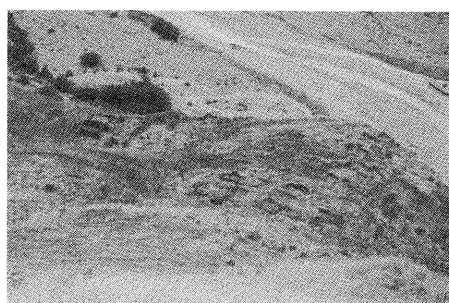


図11 パレドネス遺跡（上方より）



図12 A区



図13 R-A1、R-A2の南
（灰の集積）

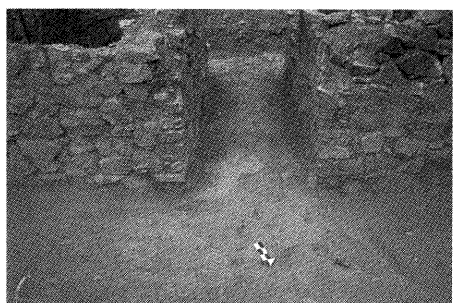


図14 R-A1、R-A2間の通路

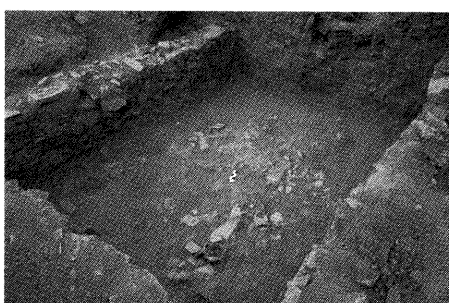


図15 R-A3



図16 R-A4 (北より)

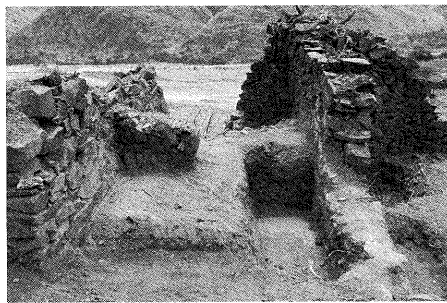


図17 R-A4 (AM-1とAM-6の間)



図18 AM-2とAM-5の間
(R-A4)



図19 Est-A1 (R-A4)

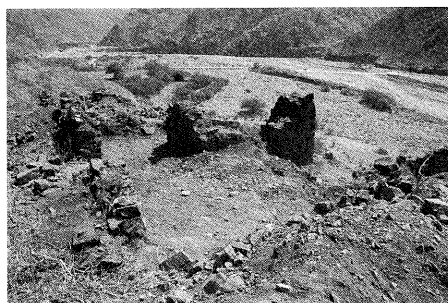


図20 Est-A2



図21 Est-A2の東コーナー (岩盤)



図22 Est-A3

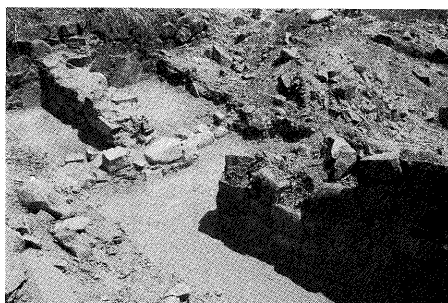


図23 R-B1、R-B2

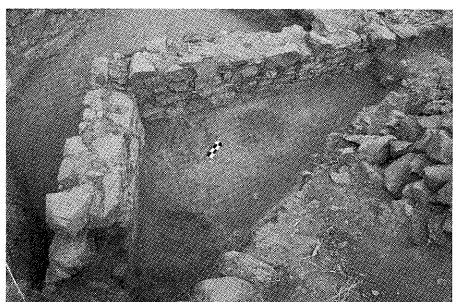


図24 R-B3 (3つの炉)



図25 Est-B1

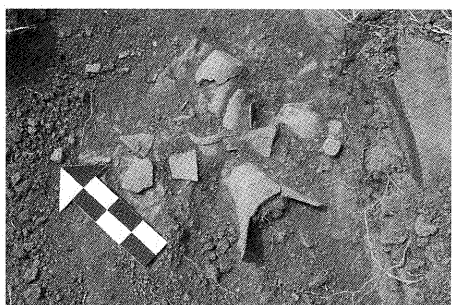


図26 奉納B1 (Est-B1)

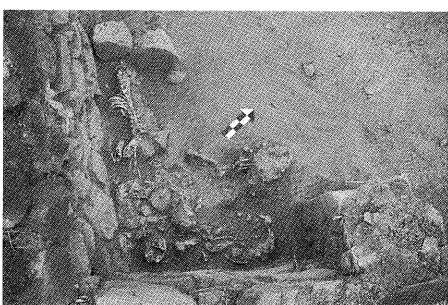


図27 BTM-1 (Est-B1)



図28 BTM-2 (Est-B1)

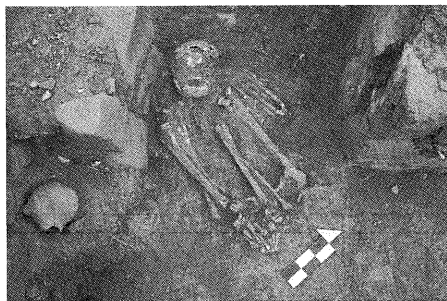


図29 BTM-2 (Est-B2)



図30 炉 (Est-B1)

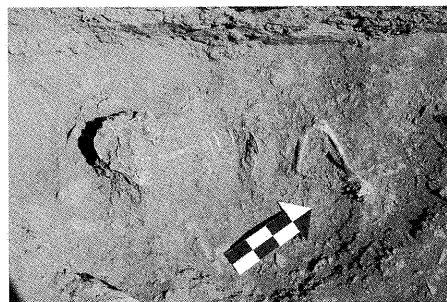


図31 動物埋葬 (Est-B1)



図32 動物埋葬 (Est-B1の南)



図33 Est-B2



図34 奉納B2 (Est-B2)



図35 Est-B3

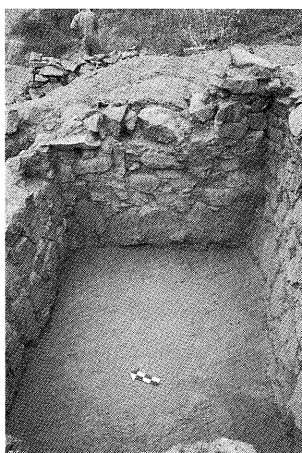


図36 Est-B3内部

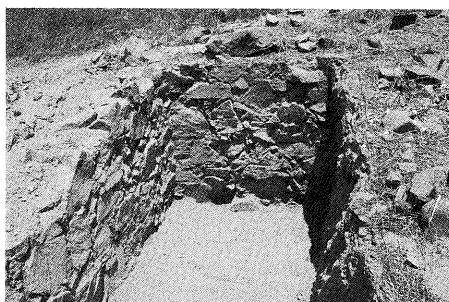


図37 R-B8



図38 R-B6



図39 加工された石 (R-B6)

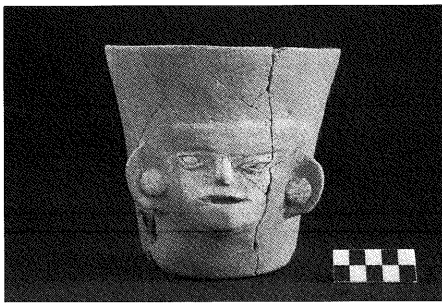


図40 人面象形土器 (Est-A1)



図41 ケロ形土器 (Est-B1)



図42 ケロ形土器 (Est-B1)



図43 ケロ形土器 (Est-B1)



図44 人物象形土器 (Est-B1)

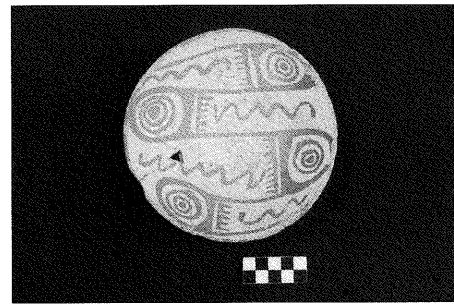


図45 海岸カハマルカ (Est-B1)



図46 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期B)



図47 Cajamarca Floral Cursive
(図46の内面)

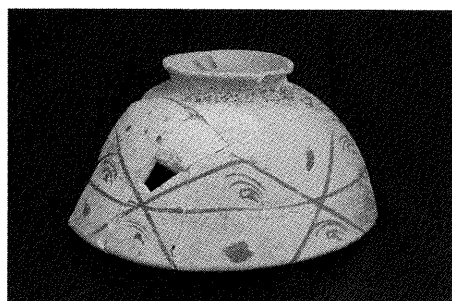


図48 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期B)



図49 Cajamarca Floral Cursive
(図48の内面)



図50 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期B)



図51 Cajamarca Floral Cursive
(図50の内面)

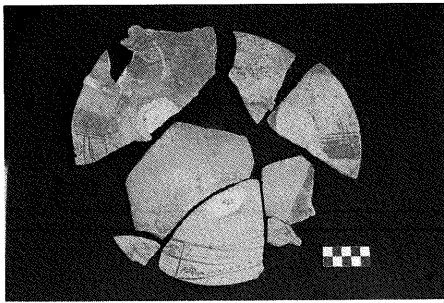


図52 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期C)

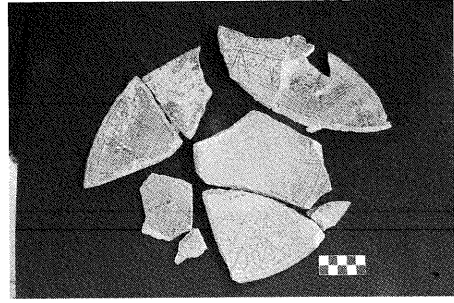


図53 Cajamarca Floral Cursive
(図52の内面)

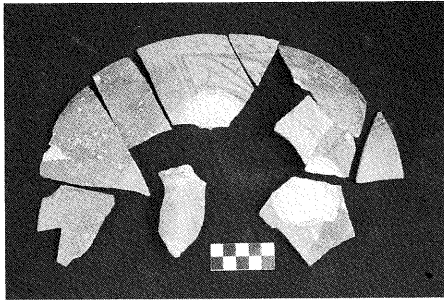


図54 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期C)



図55 Cajamarca Floral Cursive
(図54の内面)



図56 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期C)



図57 Cajamarca Floral Cursive
(図56の内面)

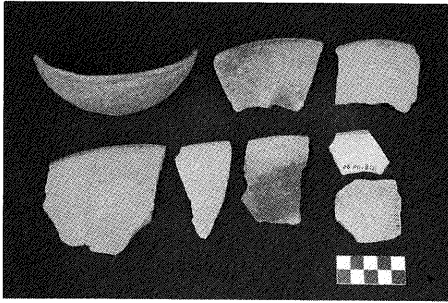


図58 Cajamarca Red Painted



図59 Cajamarca Red Painted
(図58の内面)

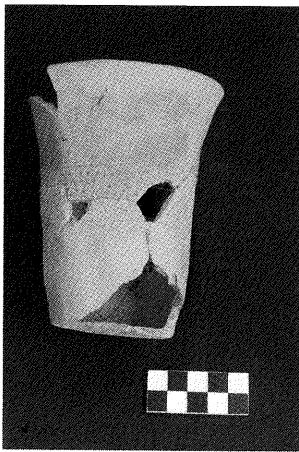


図60 コップ形土器 (Est-B2)

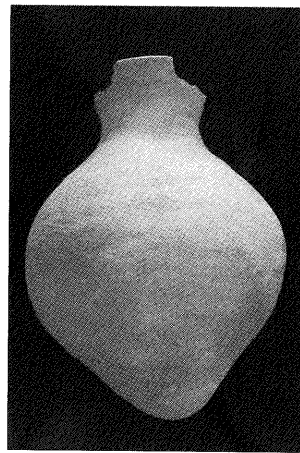


図61 尖底壺 (奉納B2、Est-B2)



図62 人面象形土器 (A区)

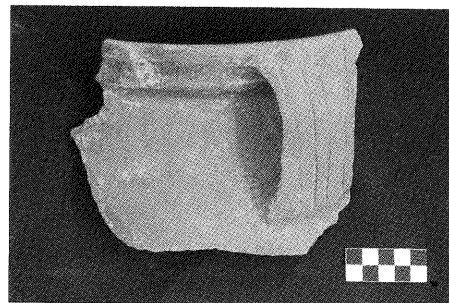


図63 Cajamarca Coarse Red

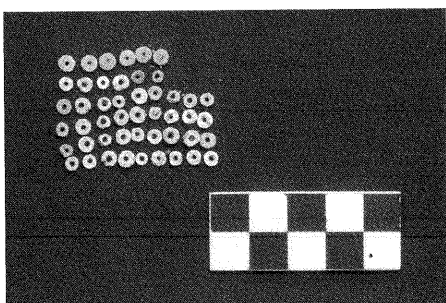


図64 ビーズ (Est-A1)



図65 金属製留めピン (A区)

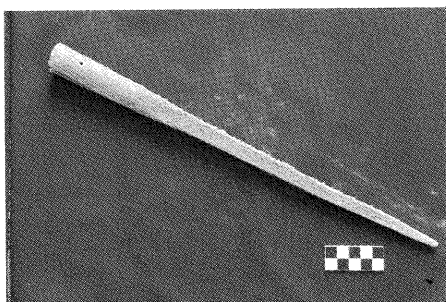


図66 金属製品 (R-A3)

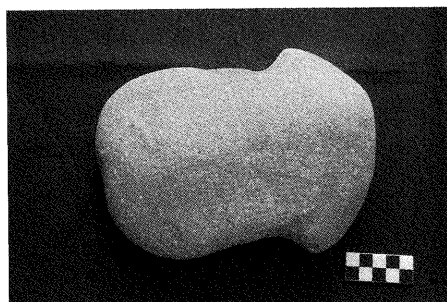


図67 斧形石器 (R-A3)

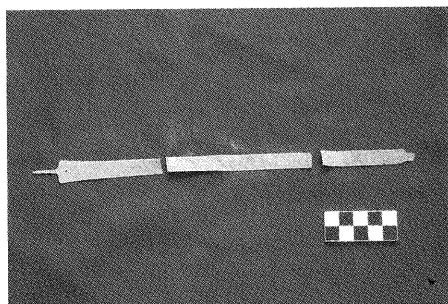


図68 金属製頭飾り (Est-B1)

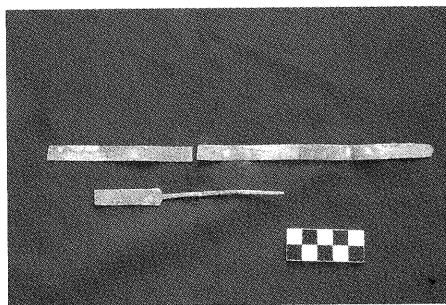


図69 金属製頭飾り (Est-B1)

参考文献

- Bennett, W. C.
 1944 The North Highlands of Peru: Excavations in the Callejon de Huaylas and at Chavin de Huantar. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 39(1):1-114.
- Bernuy, Katiusha, and Vanessa Bernal
 2005 Influencia Cajamarca en los rituales funerarios del período Transicional en San José de Moro. *Corriente Arqueológica* 1: 61-77.
- Castillo, Luis Jaime
 2001 The Last of the Mochicas: A View from the Jequetepeque Valley. In *Moche Art and Archaeology in Ancient Peru*, edited by J. Pillsbury, pp. 306-332. National Gallery of Art, Washington.
 2003 La presencia de Wari en San José de Moro. *Boletín de Arqueología PUCP* 4: 143-179.
- Cerrón-Palomino, R.
 2000 *Lingüística Aimara*. Centro de Estudios Regionales Andinos "Bartolomé de Las Casas", Lima.
- Hyslop, John
 1984 *The Inka Road System*. Academic Press, New York.
- Instituto Nacional de Cultura, filial Cajamarca
 1997 *Defensa, conservación y levantamiento topográfico del monumento arqueológico Tantarica-Contumazá*, Informe-I etapa, informe al Instituto Nacional de Cultura, filial Cajamarca, Cajamarca.
- Isbell, William H.
 1997 *Mummies and Mortuary Monuments: A Postprocessual Prehistory of Central Andean Social Organization*. University of Texas Press, Austin.
 2001 Huari: crecimiento y desarrollo de la capital imperial. In *Wari: Arte Precolombino Peruano*, edited by L. Millones, pp. 99-172. Fundación El Monte, Sevilla.
- Julien, Daniel G.
 1988 *Ancient Cuismancu: Settlement and Cultural Dynamics in the Cajamarca Region of the North Highlands of Peru*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Texas at Austin.
- Kato, Yasutake
 1979 Chullpas at Tornapampa. In *Excavations at La Pampa in the North Highlands of Peru*, Edited by K. Terada, pp. 163-166. University of Tokyo Press, Tokyo.
- Kroeber, A. L.
 1925 The Uhle Pottery Collections from Moche. *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology*, 21(5): 191-234.
 1926 Archaeological Explorations in Peru, Part 1: Ancient Pottery from Trujillo, First Captain Marshall Field Archaeological Expedition to Peru, 43 p. with 13 plates; Chicago: Field Museum of Natural History, Anthropology, Memoirs, Volume II, No. 1.

Lau, George F.

- 2000 Espacio ceremonial Recuay. In *Los Dioses del Antiguo Perú*, edited by K. Makowski Hanula, pp. 178-197. Banco Crédito del Perú, Lima.
- 2002 Feasting and Ancestor Veneration at Chinchawas, North Highlands of Ancash, Peru. *Latin American Antiquity* 13(3): 279-304.

Lumbreras, Luis G. (ルイス・G・ルンブレラス)

- 1974[1977] *The Peoples and Cultures of Ancient Peru*. Translated by B. J. Meggers. Smithsonian Institution Press, City of Washington. (『アンデス文明-石期からインカ帝国まで-』増田義郎訳：岩波書店)。

Matsumoto, Ryoza

- 1993 Dos modos de proceso socio-cultural: el Horizonte Temprano y el Periodo Intermedio Temprano en el valle de Cajamarca. In *El Mundo Ceremonial Andino*, edited by Luis Millones and Yoshio Onuki, pp. 169-202. National Museum of Ethnology, Osaka.

Montenegro Cabrejo, Jorge Antonio

- 1997 *Coastal Cajamarca Pottery from the North Coast of Peru: Style, Technology, and Function*. M.A. thesis, Department of Anthropology, Southern Illinois University.

Murra, John V.

- 1972 El "control vertical" de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562, por Iñigo Ortiz de Zúñiga*, edited by J. V. Murra, pp. 429-476. Documentos para la Historia y Etnología de Huánuco y la Selva Central, Vol.2. Universidad Nacional Hermilio Valdizán, Huánuco.

Paredes, J., B. Quintana and M. Linares

- 2002 Tumbas de la época Wari en el Callejón de Huaylas, Ancash. *Boletín de Arqueología PUCP* 4(2000):253-288.

Pärssinen, Martti

- 1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization*. Studia Historica 43. Societas Historica Finlandiae, Helsinki.
- 1997 Investigaciones arqueológicas con ayuda de fuentes históricas: experiencias en Cajamarca, Pacasa y Yampará. In *Saberes y Memorias en los Andes: In Memoriam Thierry Saignes*, edited by Thérèse Bouysson-Cassagne, pp. 41-58. Institut des Hautes Études de l'Amérique Latine, Paris. Institut Français d'Études Andines, Lima.
- 2003 Copacabana: ¿el nuevo Tiwanaku? Hacia una comprensión multidisciplinaria sobre las secuencias culturales post-tiwanacotas de Pacasa, Bolivia. In *Los Andes: cincuenta años después (1953-2003). Homenaje a John Murra*, edited by A. M. Lorandi, C. Salazar-Soler and N. Wachtel, pp. 229-280. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Ravines, Rogger

- 1982 *Arqueología del Valle Medio del Jequetepeque*. Materiales para la Arqueología del Perú / 2. Proyecto de Rescate Arqueológico Jequetepeque, Instituto Nacional de Cultura, Dirección

- Ejectiva del Proyecto de Irrigación Jequetepeque – Zaña, Lima.
- 1985 *Cajamarca Prehispánica: Inventario de Monumentos Arqueológicos*. Inventarios del Patrimonio Monumental del Perú 2. Instituto Nacional de Cultura de Cajamarca, Corporación de Desarrollo de Cajamarca, Cajamarca.
- Reichlen, Henry and Paule Barret Reichlen
- 1949 *Recherches Archéologiques dans les Andes de Cajamarca*. *Journal de la Société des Américanistes* 38 137-174.
- Shady, Ruth, and Hermilio Rosas
- 1976 *Enterramientos en Chullpas de Chota (Cajamarca)*, Investigaciones de Campo No. 1. Museo Nacional de Antropología y Arqueología, Lima.
- 1977 El Horizonte Medio en Chota: prestigio de la cultura Cajamarca y su relación con el "Imperio Wari". *Arqueológicas* 16: 1-75.
- Shimada, Izumi
- 1995 *Cultura Sicán: Dios, Riqueza y Poder en la Costa Norte del Perú*. Fundación del Banco Continental para el Fomento de la Educación y la Cultura, Edubanco, Lima.
- Terada, Kazuo and Matsumoto, Ryozo
- 1985 Sobre la cronología de la Tradición Cajamarca. In *Historia de Cajamarca 1: Arqueología*, edited by J. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano and R. Ravines, pp. 67-89. Instituto Nacional de Cultura – Cajamarca, Cajamarca.
- Terada, Kazuo and Onuki, Yoshio (eds.)
- 1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. University of Tokyo Press, Tokyo.
- 1985 *The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzon, 1982*. University of Tokyo Press, Tokyo.
- Topic, J. R.
- 1991 Huari and Huamachuco. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, edited by W. H. Isbell and G. F. McEwan, pp. 141-164. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*, Washington D.C.
- Topic, J. R. and T. L. Topic,
- 1985 El Horizonte Medio en Huamachuco. *Revista del Museo Nacional* 47: 13-52.
- Topic, J. R. and T. L. Topic,
- 2001 Hacia la comprensión del fenómeno Huari: una perspectiva norteña. *Boletín de Arqueología PUCP* 4(2000): 181-217.
- Topic, T. L. and J. R. Topic,
- 1984 *Huamachuco Archaeological Project: Preliminary Report of the Third Field Season, June-August 1983*. Trent University Occasional Papers in Anthropology 1. Department of Anthropology, Trent University, Peterborough, Ontario.
- Ugaz Moro, J.

- 1999 *Paredones, Un asentamiento Cajamarca En la Cuenca Alta del Jequetepeque: Una Aproximación a su funcionalidad.* Proyecto de Investoigación Para Optar el Titulo de Lic. En arqueología. Facultad de CC.SS., Universida Nacionla de Trujillo, Trujillo.
- Watanabe, S. (渡部森哉)
- 2002 Wari y Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 5 (2001):531-541.
- 2004a El reino de Cuismanco: orígenes y transformación en el Tawantinsuyu. *Boletín de Arqueología PUCP* 6 (2002).
- 2004b 『先スペイン期アンデスにおける社会動態と構造』、博士学位論文、東京大学。
- 2005a 「カハマルカ文化再考」『マヤとインカ-王権の成立と展開-』（貞末堯司編）、pp. 237-251、同成社、東京。
- 2005b 「ペルー北部高地、タンタリカ遺跡第三次発掘調査-2004年-」『古代アメリカ』 8:51-70.
- 2006 Una aproximación a la cultura Cajamarca: su relación con otras culturas. *Espiga II Etapa* 9:83-96.
ms. La cerámica caolín en la cultura Cajamarca, en la sierra norte del Perú: el caso de la fase Cajamarca Media.
- Watanabe, S. and M. B. Echevarría Jara
- 2007 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica en Paredones - Cajamarca.* Instituto Nacional de Cultura.